白蘭の野望

⊠椿⊠

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

白蘭が世界の支配者になるために様々な考えを巡らせた結果、ある考えに至り、ある女体化したキャラを調教し、自分のものにする物語です。

あるキャラは先天性女体化で、小学５年からスタート、白蘭はヤング白蘭で、ドＳです。

調教の順番としては

①あるキャラ

②笹川京子

③三浦ハル

④クローム髑髏
⑤ユニ　　です。
順番は前後するかもしれません。
投稿は二週間ごとに投稿する予定です。
気分によっては早く投稿されるかも知れません。
6月7日、『洗脳しようか』の冒頭に京子とハルの容姿の描写を追加しました。

目次

始めようか（乳首責め）――――1
堕ちようか（調教）――――14
洗脳しようか（洗脳）――――36
依存させよっか　その1（乳首責め）
51

始めようか （乳首責め）

「勝てない。どうして綱吉君に勝てないんだ」
白蘭はそう呟いた。
彼の能力である、平行世界にいる全ての自分の知識と思惟を共有する力。
その力でみる平行世界は全て、ボンゴレのボスである沢田綱吉に負ける姿ばかりだ。
白蘭は考えた。
どうすれば勝てるか。
平行世界の知識で得た転生の力で何度もトライしても勝てない。
もっと早く生まれて、力をつけて挑んでも勝てない。
暗殺しようとしても必ず失敗する。
「どうすればいい」
白蘭は考える。
世界の頂点に経つ過程を。
それは綱吉に勝つ、もしくは排除することだ。
しかし、勝つことはできない。

それは実証済みだ。
では排除は？
まだ暗殺しか試していない。
白蘭は考える。
誘拐はどうだ。
そう考えた白蘭は実行に移す。
結果は失敗。
なぜ失敗したか考える。
「そういうことか」
様々な検証の結果、綱吉に危害を加えようとすると必ず失敗することが分かり、綱吉の肩をぽんと触れることは何者の邪魔が入ることはなかった。
白蘭は考える。
危害を加えず、綱吉を排除する方法を。
「そういえば・・・」
白蘭は綱吉の性別が女性になっていた世界があることを思い出した。
確率は低いが今まで２００程の転生を繰り返す中で５回程あったのだ。
「そうだ」

籠絡すればいい。
女性である綱吉を調教し、自身の虜にしてしまえばいい。
そう考えた白蘭は転生を繰り返す度に女性を上手く扱えるように技術を身に付け始めた。
最高の調教師から調教の技術、媚薬の調合方法、調教器具の作り方など、平行世界から知識を集め、技術を高めていった。
そして・・・。
「初めまして、綱奈（つな）ちゃん」
「お兄さん・・・誰？」
「僕かい。僕は白蘭」
白蘭は計画を実行に移した。
今、白蘭の目の前にいるのは性別が女の沢田綱吉。
女性の場合の名前は綱奈（つな）と言い、現在小学５年生。
顔は将来美しくなると言えるほど整っており、蜂蜜色の瞳とその雰囲気からは優しさが感じられる。
栗色の髪は所々ツンツンとしていて、肩程まで届く長さがあり、太陽の光が反射すると美しく映える。

身長は１４０ｃｍ程で、身体の発育は年相応だ。
彼女がリボーンと会うのは中学二年の時であり、この頃から調教しなければ間に合わず、完全に依存させるには時をかけ、快楽に漬け込んでいくしかないのだ。
「僕は君のことが好きなんだ。君はどうだい？」
白蘭はそう言って、綱奈の目の前に手をかざす。
すると、綱奈の瞳からは意識が抜け、虚ろ瞳になる。
「私も好きです」
感情のない声でそう言う綱奈。
「それは嬉しいね。さぁ、僕の家に遊びに行こう」
「はい。白蘭様」
「う～ん。白蘭って呼び捨てにしてほしいな。敬語も使わなくていいよ」
「分かった。白蘭」
白蘭から差し出された手を綱奈は迷いなく掴み、白蘭の家に向かっていく。
白蘭はこの日のために、平行世界の知識を使い、資金を貯め、家を購入していた。
家はただの一軒家に見えるが、完璧な防音がされており、地下室には調教室がある。
「さぁ、着いた」
「お邪魔します」

白蘭は綱奈を家にいれ、地下に連れていき、催眠を解いた。
地下室は壁、床、天井までもが白かった。
ガラス張りの棚が三つほどあり、棚には様々な大きさのバイブやどう使うか想像できない道具、液体が入った小瓶などが陳列されていた。
また、ベットもあり、高級そうな見た目をしている。
「・・・ここはどこ?」
「ここは僕の家だよ」
正気に戻った綱奈は周りを見渡し、首を傾げている。
「どうして白蘭は私をここに連れてきたの?」
催眠は解いたが綱奈が名前を覚えているように、催眠中の白蘭との繋がりは消えてはいなかった。
「君を気持ちよくするためさ」
「気持ちよく?」
「うん。そうだよ。気持ちいいことは幸せになることなんだよ」
「幸せ。なりたい・・・でも、母さんが心配するよ」
綱奈は心配する母の姿を思いだし、白蘭にそう言った。
「大丈夫だよ。今日はすぐ終わるよ」

「本当?」
「約束するよ」
「分かった」
白蘭は綱奈を納得させ、早速調教に移った。
まずは調教する前に様々な箇所を開発しなければならない。
ましてや相手は子供だ。
しっかり性感帯を開発しなければ、痛がり警戒してしまう。
警戒されてしまえば最後、二度と綱奈には近づけないだろう。
催眠も万能ではなく、あまりにも警戒されると効果はない。
「まずはこれを飲んで」
白蘭はまず綱奈に小瓶に入った媚薬を与えた。
濃度は薄いため効果は低いが、この年齢だと確実に発情する。
綱奈は迷いなく、媚薬を飲み干した。
「どう?綱奈ちゃん」
「身体がポカポカする」
「効果が出た証拠だよ。上着を脱ごうか」
「うん。・・・ん、しょ」

綱奈が上着を脱ぎ終わると、彼女の可愛らしい上半身があらわになる。
胸はまだ小学5年生であるので、ほんの少し膨らんでいるくらいだ。
乳首は小さく、可愛らしいピンク色で、いやらしさの欠片もない。
肌は染みひとつない真珠のような白さである。
成長すれば確実に美しい体になるだろう。
「綺麗だね。将来はもっと綺麗になるよ」
「ありがとー」
次に白蘭は新たな媚薬の小瓶を用意し、筆を棚から取りだし、先端を小瓶に浸す。
「これを乳首に塗り込むからね。少し冷たいよ」
「乳首ってなに？」
「ん？ああ。乳首ってのはね、これのことだよ」
「ひゃっ！」
白蘭は媚薬が染み込んだ筆で綱奈の右乳輪をクルクルとなぞり、媚薬を塗っていく。
「おっぱいのこれ？」
「うん。そうだよ」
会話に最中に左の乳輪にも媚薬を塗っていき、ふ～っと綱奈の乳首に息をかける。
「ひゅみゅ～。すーすーする」

最後に乳首に媚薬を塗っていく。
「いい感じだね」
白蘭はそう言って、手にイボイボが付いた手袋を着けた。
「いくよ、綱奈ちゃん」
白蘭は人差し指で乳首を下から支え、親指を使い、上から軽くきゅっと綱奈の乳首を人差し指と親指で挟み、摘まんだ。
「ひゃあぁぁっ！」
綱奈は初めて乳首を弄られたのにも関わらず、乳首で感じていた。
これが媚薬の効果である、性感の活性化だ。
「感じたみたいだね。どんな感じ？綱奈ちゃん」
「おっぱいからふわ～って頭に何かが来て、ぴりぴりする」
「それが気持ちいいってことだよ」
「これが気持ちいい？」
「そうだよ。ほら、もっといくよ」
次は軽くクリクリと乳首を弄りだす白蘭。
「ひゃ、ひゃぁっ、ひゅむっ、ひっ、んにゃぁぁ」
「ふふっ、気持ちいいかい？綱奈ちゃん」

「んにっ、これがっ、きもち、いいっ。あああ、きもちっ、いいよっ、ひくっ、でもっ、にゃんか、オシッコがっ、パンツ濡れちゃうっ」
「それはオシッコじゃないよ。愛液って言ってね、気持ちよくなるとおまんこから出ちゃうんだ」
「愛液？おまんこ？」
「そう、気持ちよくなると出てくる液体のこと。それからお股のことだよ。これからはおまんこって言うんだ。分かったかい、綱奈ちゃん」
「うんっ、ひんっ、はぁ、はぁっ、白蘭の言う通りにする」
「でも、他の人の前では言ってはいけないよ。もちろんお母さんの前でも」
「分かっ、はひっ、た」
「いい子だ」
　そう言った瞬間、白蘭はぎゅ～～っと乳首を摘まんだ。
「んにゃぁぁぁぁっ!!」
　綱奈は体を軽くビクビクと震えさせた。
　どうやら綱奈は人生初めてのアクメを迎えたらしい。
「今の感じはどうだった？」
「頭、真っ白になって、気持ち・・・良かった」

「その感じはイク、もしくはアクメって言うんだよ」
「イク？アクメ？どっち使ったらいいの」
「どっちでもいいよ。でも、イク時やアクメする時はちゃんと宣言するんだよ」
「分かった」
「じゃあ、もう一回やってみようか」
「うん」
　そして白蘭は再び、綱奈の乳首を弄り始める。
　クリクリと横に揉み込んだり、コリコリと縦に揉み込んだり、ギュッギュッと摘まんだりして、綱奈の乳首を刺激し、乳首特有の甘い快楽を生み出す。
「ひやぁぁ、んんっ、にゃぁぁ、んみゅ、んにいいっ、あっ、あんっ、あっ」
　綱奈の声には艶やかさが出始め、息づかいも荒くなっていき、乳首は小学生の物とは思えないほどビンビンに勃起し、とてもいやらしく見える。
「びゃく、らんっ、んあぁっ、ぎゅ～～って、してっ、んくぅっ、おねがいっ」
「もうイキそうなのかい？」
「う、ん。もう、イキ、そうっ。イクっ、イカせてっ！」
「いいよ。さぁ、イって」
　白蘭はぎゅ～～っと綱奈の乳首を摘まみ、グリグリと乳首を転がす。

「んにゃぁっっ！イクっ、白蘭っ、私っ、イクっ、ひにゃぁぁぁぁぁぁぁっっ!!」
　綱奈は乳首から来る一際大きい快楽に体をビクリと跳ねさせ、乳首アクメを迎え、綱奈のマンコからはトロトロと愛液が垂れ出ていた。
「んはぁっ、きもち、いいよぉ。もってしてぇっ、白蘭っ」
「今日はここまでだよ」
「何でぇ、もっとしてよぉ」
「もう帰らないとお母さんが心配するよ」
「うう～、でも」
「また明日来てもいいから」
「ほんとっ！」
「本当だよ」
「分かった。帰る」
「いい子だね、綱奈ちゃん」
　白蘭は綱奈の頭を優しく撫でる。
「あっ、パンツどうしよう。怒られちゃうかも」
　綱奈のパンツはマンコから溢れ出た愛液でグショグショに濡れているのだ。
「はい、替えのパンツ」

綱奈のパンツは白の何処にでも売っていそうなパンツで、白蘭はこの日のために買っていたのだ。
「わ〜、ありがとう白蘭」
「また明日迎えに行くからね。今日のことは誰にも言っちゃいけないよ。誰かに言ったらもう僕は来ないからね」
「うん。分かった」
「よし。じゃあ、近くまで送ってあげるよ」
綱奈は白蘭に連れられ、白蘭の家を出て、家の近くまで送ってもらい、白蘭と別れた。
綱奈は帰路の中、今日のことを振り返っていた。
（気持ちよかったなぁ。明日も気持ちよくしてもらおっ）
そして、白蘭の顔も思い出す。
（白蘭、カッコよかったなぁ。キラキラしてて。私のお婿さんになってくれるかな）
白蘭は綱奈に自身への好意を催眠で植え付けていた。
とは言っても、白蘭は種を植えたにすぎない。
育てるのは綱奈であり、水を与えるのは白蘭だ。
綱奈を惚れさせる。
これも白蘭の作戦である。

「お帰り、綱奈。友達と遊んでたの？」
家に帰ると、母親である奈々がそう質問してきた。
「うん。面白かった」
「そう。それは良かったわね」
こうして、綱奈の調教は始まった。
白蘭は確かな一歩を踏み出したのだ。

堕ちようか（調教）

それから白蘭は2週間かけて綱奈の乳首を開発し、乳首はもう媚薬を使わずとも感じるようになっていた。

さらに2週間の間に淫語も教え、今日は最後のクリトリスの開発が行われる。

「いらっしゃい、綱奈ちゃん」

「お邪魔します」

流石に2週間も通うと道を覚えてしまい、綱奈は一人で来るようになった。

「どう？白蘭、可愛い？」

綱奈はクルリとその場で一回転をした。

ワンピースのスカート部分がふわりと舞い、にこりと白蘭に微笑みかける。

「可愛いよ」

「えへへ」

二人は話ながら地下へ向かっていった。

地下へ着くと、白蘭は準備を始める。

乳首を開発したときと同様に媚薬の小瓶と筆、イボイボの手袋を用意する。

さらに、小さいローター、クリトリス専用のシリコン製の吸引器を用意する。
白蘭が準備している間に綱奈はワンピースとパンツを脱ぎ、生まれたままの姿になった。
この地下室は冬でも調教できるように空調が完璧で、綱奈が体調を崩すことはない。
「今日からクリトリスの開発をするよ」
「うん。ここだよね」
綱奈は皮に隠れた、自身の小さく可愛いクリトリスを指差す。
「そうだよ。」
やることは乳首を開発した時と同じだ。
媚薬を塗り、指で刺激してアクメさせる。
「んくぅぅぅぅ!」
ビクンっと乳首の時よりも大きく身体を震えさせ、アクメを迎えた。
「次はこれだよ」
白蘭は手袋を外し、小さいローターを手に取った。
「なにこれ?」
「使ってみれば分かるよ。いくよ」
ローターのスイッチを入れると静かにぶぃぃぃぃぃぃんという音がローターから

聞こえ始める。
白蘭はゆっくりと綱奈のクリトリスに近づけていき、ちょんと少しだけ当てる。
「ふわぁぁっ！ビックリしたっ」
「どう？気持ちいいでしょ」
「うん。ゾワゾワが一瞬で来た」
「少しずつ慣れていこうね」
そう言って白蘭はローターを当てる時間を増やしていく。
「はぁぁっ、ふわっ、ひにゃぁっ、はんっ、はっ、はぁ、んはぁっ、ふわぁぁぁぁっっ！」
「うん。いい感じだね。」
指で弄ったお陰かローターの刺激も気持ちいいらしく、悦に入っている。
一分程で白蘭はローターを止め、吸引器を手に取った。
「次はこれだよ」
白蘭は吸引器の空気を抜き、先端をクリトリスに入れ、手を離す。
キュポッという音を立て、クリトリスが強く引っ張られる感覚を綱奈は感じた。
「どうだい？綱奈ちゃん」
「う～ん。少し痛いかな」
「だよね。でも、こうするとどうかな？」

クリトリスを吸引している道具を引っ張る。
ポッという音が出て、クリトリスが解放される。
そしてまた、吸引される。
これを何度も繰り返していると、綱奈は少しずつ感じ始めていた。
「んっ、んん、んぁっ、んん、少しずつ気持ちよくなってきた」
「あと少しかな」
そう言って白蘭は少しずつスピードを早くしていく。
「んあぁっ、ああっ、あっ、ああっ、はあっ、んっ、ああぁっ」
「よし、ここまでかな」
白蘭はクリトリスの吸引を止めた。
「な・・・何で止めるの?もう少しで・・・イけそうだったのに」
「もうちょっとしたら分かるよ。さぁ、次だ。ベットに行こう」
綱奈の背中を押し、白蘭は綱奈にベッドにいくように促す。
そして、綱奈がベッドの側に行くと、ある指示をする。
「ベッドの中央に上に横になって。そうそう。そうしてら足を立てて広げて、おまんこが見えるよう大きくね。M字に開くんだ」
綱奈は言う通りに、恥ずかしげもなく足を開くと、ぴっちりと閉じられていたマンコ

が少しだけ開かれる。
「ちょっと待ってね」
棚から媚薬クリームを取りだし、それを人差し指と中指に塗り、綱奈の元へ行く。
「ゆっくり入れるからね」
「うん」
白蘭は横になっている綱奈の正面に膝立ちで座り、ゆっくりと慎重に綱奈のマンコに人差し指を入れていく。
「んっ、んん」
指が完全に入ると、ゆっくり抜き出す、この動作を繰り返し、少しずつ膣を慣らしていき、それと同時に媚薬クリームも染み込ませていく。
そして慣れてきたので、中指も合わせて二本同時に、綱奈のマンコに入れていく。
「あくっ、あっ、んんっ、ん」
綱奈は少しだけ顔を歪めるが、白蘭が指の抜き差しを繰り返すと、だんだんと顔が緩まる。
「少し動かすよ」
マンコに入っている指を少しだけ曲げ、まるで調べるように膣内の様々な場所を押したりして刺激していくと、マンコがだんだんと愛液で濡れ始める。

「なるほどね。少し速くしてみようか」
一度指を抜き出し、再び入れていき、今度は速く抜き差ししていく。
それだけではなく、たまにぐっと押したりして、綱奈の反応を確かめる。
「あっ、んあ、ふっ、ふっ、はあぁ、ふあぁぁ、んふっ、ふあっ」
「段々慣れてきたね。声に艶が出てきたよ」
「んくっ、ふぁっ、ん、ん、んあぁっ、そこっ、あっ、あっ、あっ、きもちっ」
「ここもいいよね？」
「ふあぁぁぁっ、はぁっ、はぁっ、すごいい、そこっ、はっ、んにっ、すごいっ♥」
綱奈は白蘭によって発見されたGスポット等の性感帯を刺激され、喘ぎ声を上げていく。
未発達だった性感帯は媚薬によって活性化され、白蘭によって開発される。
段々と快楽が増していく自信の身体。
綱奈は快楽を与えてくれる白蘭に少しずつであるが好意を抱き始めていた。
こんな経験を与えてくれるのはこの人だけだ。
そんな思いも綱奈にはあった。
「よーし、ちょっと本気だそうか」
白蘭はお腹の下の部分、ちょうど膣の部分を押す。

膣内では上壁が押され、刺激しやすくなる。
「じゃあ、いくよ」
そう言うと白蘭は二本指で、勢いよく綱奈の膣をコチュココチュココチュと擦り始める。
膣から訪れる快楽は一瞬で綱奈の脳内に押し寄せ、綱奈に襲いかかった。
「ひゃぁぁぁぁぁ、ああっ、あっ、あああぁぁぁぁぁぁっっっ♥♥」
「きもちい、きもちよすぎっ♥おまんこきもちいいいいい」
「いくぅっ、もういくよぉ、んひっ、いくぅぅぅぅぅぅぅ♥♥」
本気で責める白蘭の技術は凄いもので、流石、最高峰の調教師から学んだことだけはある。
その技術に綱奈は翻弄され、足を支えに、腰をビクンと突っ張り、アクメした。
「まだだよ」
「へぁぁっ、らめっ、いったばっかりだからぁ♥だめっ、きもちいのだめぇぇぇ!!」
「ダメだよ綱奈ちゃん、嫌がっちゃ。天国見せてあげる」
白蘭は指を膣に入れた瞬間に回転させ、中を刺激していく。
グジュボグジュボと綱奈のマンコからはいやらしい音が聞こえ、綱奈は愛液を垂れ流して、本能の赴くままに腰をカクつかせ、快楽の暴力に犯される。
「またっ、んくぅぅぅぅぅ、いっくっ!!んあぁぁぁぁぁぁ、いくっ、いくっっっっ!!!」

「もうやめっ、んおぉっ、おおっ、いぎゅっ!!くぁぁぁっ、んひぃぃぃっ、へぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「ああっ、あぁぁぁぁ、これっ、吹いちゃうぅっ、お潮吹いちゃうっ♥♥びゃくらんっ、らめっ、とめへっ、へひっ、へひゃぁぁぁぁぁ!!」
「でるでるでるでるっっ!!出ちゃうっ、んにゃぁぁっ、んおおおおおおおおっっ♥♥♥」
決して小学生が上げることのない獣の様な喘ぎ声を上げて、今までで一番高く腰を突き上げながら、綱奈が大きなアクメをした瞬間、潮が綱奈の尿道から噴水のように吹き出され、吹き出す解放感も快楽に変わり、激しくアクメし続ける。
「とめへぇぇぇ、びゃく、らんっ、もうきもちいのいやっ、いやなのぉっ」
「ダメだよ。まだまだ」
白蘭は手を休めることはしなかった。
ここで綱奈に止めを刺すためだ。
アクメすることを嫌がらない、どんなにアクメしても快楽を貪り続ける。
快楽に恐怖しない、そんな存在に堕とすため。
白蘭は指を入れたまま、確実にGスポットをグイグイ押したり、細かい動きでコスコスと擦り、アクメへ導く。

「そこっ、だめっ、あたま、変になるっ、きもちいの、だめぇ」
「うあぁぁぁぁ、ああっ、まひゃ、いくぅっ、へひっ、いくぅぅぅぅぅぅぅぅ!!」
「へえあぁぁっ、またでるっ、お潮でるっ!!」
またも体をガクガクと痙攣させながら、ぷしゃあぁぁぁと潮を吹き出す綱奈。
「気持ちいいんだね。また出そうでしょ?」
「んへぇぇぇ、うんっ、でるっっ、お潮でるっ、んふぅぅぅぅぅぅぅぅぅっっ!!」
腰をカクカクッ、カクカクッと振り、潮を吹きながら綱奈はアクメした。
そして、白蘭は指を抜きだした。
「んあぁぁぁぁっ、はぁ、はぁ、はぁ」
「あと少しだよ」
今度は先端が太く大きいが、そこから根本までは細い、ポルチオ開発用バイブを用意した。
それをゆっくりと綱奈のマンコに挿入していくと、コツンとバイブが壁に当たった。
それは子宮口、つまりポルチオである。
「当たったのが分かるかい。これがポルチオだよ」
「うん。分かるよ」
「じゃあ、入れていくからね」

そう言って白蘭はバイブを少し押し込み、子宮内にバイブを入れていく。
「う、はぁぁぁ、はぁ、んくぅ、はぁ」
「抜くよ」
白蘭はゆっくりと子宮からバイブを抜き出し、ポルチオを刺激する。
そして、ヌコヌコとポルチオを出たり入ったりして、ポルチオを開発していく。
媚薬のお陰で、ポルチオも子宮も感じるようになっていた。
「ふわぁぁぁっ、はひゃっ、んくっ、あはぁぁ、んんん、おっ、あっ」
ポルチオを通る前に、バイブをクルクルと回転させ、ポルチオを刺激して焦らしら後にずぼっと少し勢いをつけて突いたり、ポルチオからギリギリ抜けるか抜けないかの位置で前後させ、いきなり抜き出したり等を白蘭は繰り返していく。
「ほおぉぉぉっ、おっ、ほぉぉっ♥ほぁぁぁぁっ、あぉぉぉっ♥」
ポルチオは開発されれば、あり得ないくらいの快楽を生み出す。
綱奈はその快楽に翻弄されつつある。
間抜けな喘ぎ声をだし、身体をビクつかせている綱奈は小学生では経験できないことを体験している。
「いい感じに呆けていきたね。スイッチ入れよっか」
バイブの先端にあるスイッチを中間から上にいれると、バイブが振動を始める。

「うあぁぁぁあっ、ポルチオがブルブルっ、刺激されてっ」
ポルチオに挿入するのポルチオ口に少し押しあて、振動をポルチオに与える。
そして挿入し、子宮に振動を与える。
「うおぉぉっ、おおっ、子宮が震えてっ、気持ちいいっ♥♥おくっ、おおっ、あっ」
ブルブルと震える子宮は甘い快感ではなく、底のない、深い快感を生み出している。
腰は勝手にカクカクと振り始め、子宮はキュンキュンと収縮と開放を繰り返す。
感じている綱奈を見ながら、白蘭はスイッチを上から下に下げた。
「あぁぁっ、くぅぅっ、子宮がっ、んあぁっ、掻き回されるっ」
子宮に入っていたバイブが振動を止め、グリングリンと回転し、子宮を舐めるように刺激し始めたのだ。
ゆっくりと丁寧に回るバイブは子宮全体をかき回し、子宮をマッサージしていく。
「子宮からっ、奥からっ、くるっ、いっちゃう♥ふわぁぁっぁぁぁっっ、いっくぅぅぅぅぅ!!」
綱奈は深いアクメをした。
激しいアクメではないが、綱奈の意思を何処かへと引っ張るような、そんなアクメだった。
気持ちよさも今まで経験したようなビリビリとしたものではなく、ズンズンとした、

不思議な気持ちよさだった。
「はぁぁぁっ、またっ、んっくぅぅぅぅぅっ♥♥んあぁぁぁっ、止まらないっ、アクメ止まんないっ、んあぁぁぁぁぁぁぁぁっっ♥♥」
子宮に合わせ、ポルチオも刺激されている。
子宮、ポルチオで発生するアクメは止まらない。
膣でのアクメや他の場所でのアクメは一度は手放されるもので、１００に到達すると０になり、０からスタートする。
一方、子宮、ポルチオのアクメは手離さない。
１００に到達すると７０からスタートする。
正真正銘の連続絶頂。
「いくぅぅぅぅっ、はっあぁぁぁあっ♥びゃく、とめっ、びゃくらんっ、止めてっ、んっはっ、んきゅぅぅぅぅぅぅっっ!!」
「いっ、あっ、くっ、いくっ♥んあぁぁあっ、っっ、んあぁっ、んくっ、ほっ、んあいくぅぅぅぅっっ♥♥」
「またっ、いっくぅぅ♥もっ、はっ、へあぁぁっ、いくっ♥うぁぁあっ、あぁぁあっ、おっほぉぉぉおっ♥♥」
そしてやっと、白蘭がバイブを止める。

「んあっ、ああっ、はっ、はぁっ、んはっ、んんっ、ああっ」
子宮、ポルチオのアクメは細かく痙攣を続け、浅イキを繰り返している。
白蘭は綱奈が落ち着くまでの間にベッドから離れ、棚から新たな道具を取り出す。
道具は3又に別れ、各先端には吸引器と吸引器の円上の一部分に小さなローターが付いていた。
「人間にはねぇ、快楽神経ってのがあるんだ。一般には知られてないけどね」
息を整えた綱奈に近づき、吸引器を綱奈の乳首、クリトリスに付けながら独り言のように白蘭は言う。
「この神経を開発することで、頭が感じる快感が減衰しなくなるんだ。簡単にいうと、経験したことのない快楽を味わうことができるよ」
吸引器をつけると道具の二つあるスイッチの内、一つを押す。
「ひゃっ」
乳首、クリトリスが吸引され、綱奈は驚きの声を上げる。
「いくよ」
白蘭がもう一つのスイッチを押すと、付いていたローターがぶぶぶぶと振動を始める。
「ああっ、ああっ、ん・・・んぁ、ふぅ、はぁ、んんっ」

乳首からは甘い快感が、クリトリスからは鈍い快感が発生していた。
「やっぱりクリトリスはまだみたいだね。でもこうすれば」
白蘭は吸引するスイッチの横にある三つあるダイヤルの内、一つを回していく。
「くあぁっ、はあぁ、ふあぁ、あぁぁぁ、あっ、あっ」
クリトリスから生じる快感が強いものに変わっていく。
白蘭はクリトリスの吸引を強くしたのだ。
それにより、より快感が生まれやすくなり、より快楽神経が発達していく。
「普通にやるだけじゃ、快楽神経は発達しない。なるべく性感帯は多く、同時に、同じように刺激していくんだ」
「んやぁぁっ、ふくっ、くあっ、ん、ん、あんっ、あっ」
綱奈は少しずつであるが何かが身体の奥から来ているのを感じていた。
ゾワゾワとした感覚だったり、ゾクゾクとした感覚だったり、正体は分からないが確かに感じていた。
「よし、少し強くしてみよう」
そう言って白蘭がコントローラーを操作すると、振動がヴィヴィヴィヴィヴィという少し強いものに変わっていた。
「んうぅぅ、うあぁっ、くうぅぅっ、んくっ、ふあぁぁぁ、や・・・あぁぁっ♥」

子宮が段々熱くなってきている。
そんな感覚を綱奈は感じていた。
そして、身体の奥から来ていた感覚はどんどん上に上に上がっている。
「次だよ」
振動がぶいいいいいいいいいという細かく、かつ強い振動に変わった。
「くはぁぁぁぁぁっ♥♥はぁっ、はぁっ、ひっん、やぁぁっっ、んんんんっっ」
綱奈の体は小刻みに震え、脚はガクガク、マンコからは愛液を駄々漏らし、シーツに大きな染みを作っていた。
そして何かは頭に上ってきていた。
子宮が熱い。
何かが弾けそう。
怖い。怖い。
綱奈は感じている快楽のその先、白蘭がいう未知の快楽を感じるのが怖くなっていた。
未知故の恐怖を感じているのだ。
さっきですら、凄かったのにその先なんて。
私、どうなっちゃうの。

そんな思いの中に、微かな期待もあった。
もっと気持ちよくなりたい。
もっと気持ちよくして。
もっと、もっと、もっと、もっと!!
その思いは恐怖を押し潰すように次第に大きくなっていき、何時しか綱奈の頭の中を支配していた。
白蘭が綱奈の顔を見ると、綱奈の顔は快楽を欲しがる雌の顔になっていた。
目をとろんとさせ、口は半開きで、荒い息遣いをしている。
「うん、いい顔だ。準備は万端みたいだね。さぁ、堕として上げよう」
「へひぃぃぃ、堕ち、堕ちる?」
「うん。綱奈ちゃん、君はね。快楽を貪るだけの、そんな存在に堕ちるんだよ」
「堕ちたいぃ、はっんぁ、もっとアクメしたいぃ。だから・・・ね。白蘭、堕として」
「どうしようかなぁ」
「うあぁぁっ、何でっ、堕としてよっ、もっと気持ちよくしてよぉ」
「じゃあ、僕のこと好き? いや、愛してる?」
「うんっ、愛してるっ、好き好きっ。白蘭カッコいいし、私に幸せを教えてくれたから、好き」

「僕の命令は何でも聞ける?人を裏切ったり、殺したり」
「っくあぁっ、んんっ、聞くよっ、人も殺せるっ、お母さんにも嘘つけるし、白蘭の言うこと聞くからぁ、お願いっ、いかせてぇぇっ!!!」
「そこまで言うなら。じゃあ、キスしようか」
「う〜んっ!」
綱奈は口をすぼませ、白蘭にキスをせがみ、白蘭は綱奈にキスをする。
ただのキスではない。
ディープキスだ。
白蘭は綱奈の口の中に、舌を入れ、口内を蹂躙する。
「んちゃ、んふぅっ、ふっ、んふっ、ふはっ、ふぅぅ、ぷはぁ。きもひぃ♥こんなチューはじめへっ」
「もう一回だ」
「う〜んっ!」
白蘭はさっきのキスで、どう舌を絡ませれば綱奈が感じるか。
どう吸えば感じるかを調べていた。
そして今度は本気でキスをする。
「んじゅぅぅ、んはっ、ふあっ、はっ、んふぅぅっ、ふぅ、んんんんんっっっ!!!」

綱奈は目を見開き、口の中から感じる快感に翻弄され、白蘭はキスを止める。
「へひっ、へっ、へっ、はぁぁぁ、ふはぁっ、しゅごいいいいい♥♥♥」
綱奈の口はあまりの快楽に呂律が回っていなかった。
「よし、綱奈ちゃん。堕ちようか」
「わらひぃ、堕ひるのぉ、白蘭のお嫁さんにぃ、なるぅぅ」
「バイバイ」
そして白蘭が振動を変えると、びいいいいいいという振動に変わり、乳首、クリトリスがブルブルブルブルと凄い勢いで震え始める。
頭に上っていた何か、蓄積されていた快楽の球が弾け、脳内に途方もない快楽が広がっていく。
その快楽は乳首、クリトリスから発達しきった快楽神経を通って、減衰することなく常に補給され、消えることのない快楽となる。
「へ　にゃ、　へ　あぁぁぁぁっ　♥　へ　ひっ　♥　ん　ほぉぉっ　♥　♥　んほぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっっっ!!」
「あーあ、女の子が上げちゃいけない、雌の声上げちゃったね」
綱奈は口をおの字に開け、間抜けな浅ましい喘ぎ声を部屋中に響き渡らせ、尿道からは潮がぷしゃしゃしゃやややと吹き出すのではなく、尿を出すように出ている。

マンコからは愛液と同時に白濁色の本気汁を出し、くぱくぱとマンコを自然に開け閉めしている。
「んおおおおおおおおお♥♥お〟お〟っ、お〟っ、お〟お〟お〟お〟お〟っっっっ!!!」
「あたまぁ、チカチカするぅぅ、お〟お〟っ♥すごっ、これっ、すごっ♥んお〟お〟お〟お〟お〟お〟お〟っっっ♥♥」
「しきゅ、きゅんきゅん、するっ♥しきゅっ、きもひっ、へひっ」
アクメは止まらない。
子宮の奥が何かを求めるようにきゅんきゅんと反応する感覚も快楽に変わり、乳首、クリトリスから生じる快楽は、波が合わさり大きくなるように、合わさり、大きくなり、脳に押し寄せる。
気持ちいい。
綱奈の頭の中にはこの思いしかない。
だからこそ、白蘭は調教する。
「お〟っ、あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟っっっっ♥♥♥♥」
「僕のことを忘れちゃいけないよ」
白蘭はいつの間にかバイブを持ち、綱奈のマンコに突っ込んでいた。

綱奈のマンコにぴったりと合い、Gスポットやその他の隠れた性感帯を同時に刺激する綱奈専用に作った特注のバイブだ。
さらに、ポルチオまで刺激出来るように、先端が少し大きい。
ポルチオはマンコと同様にくぱくぱと開け閉めしており、バイブをパクッと掴み、白蘭がバイブをマンコギリギリまで引くと、チュポッと強制的に離される。
この時の快楽ははかり知れない。
白蘭はガシュガシュとバイブをピストンし、綱奈に話しかける。
「この快楽を与えているのは誰だい」
「あ〝お〝っ、びゃ、へひっ、びゃく、らんっ、ん〝お〝お〝お〝お〝っっ♥♥」
「うん、そうだね。でも、今僕のこと忘れてたでしょ」
「ごめっ、ごめっ、イグゥゥゥっっ♥お〝ぐっ、ごめっ、なさいっ」
「本当に反省してる？」
「しへっ、へひいいいいいっっっっ♥しへるっ、ごへんなさいいいい」
綱奈が謝った瞬間、バイブを回転させながらずぼぉぉぉっと勢いよく綱奈のマンコに突き刺す。
「あ〝っへえええええええええええええええええええええええ♥♥♥♥」
「次はないよ」

綱奈は脚をM字に思いっきりあげると、潮をぶしゅうううと吹き出し、白眼を向いてしまった。
圧倒的快楽だった。
脳内の快楽と同時に膣、Gスポット、ポルチオ、子宮、全てが同時に刺激され、作り出されたもはや暴力ともいえる快楽は子供である綱奈では耐えられるものでなく、気絶してしまった。
だが、綱奈の中に白蘭の存在が確実に刻み込まれた。
快楽を通して、教え込まされた。
愛する存在として。
絶対的に服従する存在として。
「へひっ、へあっ、あ〝っ、お〝っ、あ〝あ〝っ♥んへぇぇ、へあぁっ、へひっ♥」
気絶しても尚、アクメし続ける綱奈の体は完全に開発され、堕ちきっており、白蘭は綱奈のその様子を見ながら、ニコニコとした笑みを浮かべていた。
「勝った。これで綱奈ちゃんは僕のものだ。あとはユニちゃんだけ。でも、綱奈ちゃんにも優秀な部下がいた方がいいし。う～ん、確か・・・京子ちゃん、ハルちゃん。この二人は駒にして鍛えたらいい部下になりそうだ。あと、クロームちゃんもいい駒になりそうだ」

白蘭は綱奈のために、京子とハルを手駒にしようと考え、また優秀な幻術師であるクローム髑髏も綱奈の部下にしてしまおうと考えた。

もう白蘭は止まらない。

トゥリニセッテの一角である綱奈を手にいれた今、止まることは出来ない。

アルコバレーノを全員殺し、マーレリングを手に入れ、ユニをこの手に入れるまでは・・・。

洗脳しようか（洗脳）

白蘭の家の地下二階。
そこには怪しげな白い機械が沢山あった。
例えば２ｍ程の高さがある機械の柱。
拘束具が付いた機械の椅子。
人一人入りそうな機械の棺。
これらは全て白蘭が科学者達に作らせた洗脳装置だ。
その中で機械の柱に二人の少女が拘束されていた。
一人は笹川　京子。
もう一人は三浦　ハルだ。
二人は柱の正面に拘束されており、両手両足を柱の中に入れる穴に入れられていた。
意識は薬で奪われており、顔を下に向け、うっすらと開いている目は虚ろである。
さらに二人は裸で、乳首やクリトリスには柱から伸びている注射針がささり、マンコ、アナルにはバイブが突っ込まれており、お腹や成長していない胸、子宮のちょうど真上に電極パッドが貼ってあった。

「よくやったね、綱奈ちゃん」
「えへへ」
綱奈は白蘭に頭を撫でられ、可愛い笑顔を見せ、手に持っていた二枚の写真を白蘭に返した。
一枚目の写真には京子が写っていた。
穏やかな優しそうな瞳に朗らかな笑顔、肩にギリギリ届きそうな外ハネの茶髪が特徴的な少女だ。
二枚目にはハルが写っていた。
パッチリとした大きな瞳に元気ハツラツな笑顔、セミロングの黒髪を後ろで一つに纏めているのが特徴的だ。
京子、ハルを拐ったのは白蘭に命令された綱奈だ。
綱奈は白蘭の命令通りに動き、まだ知りもしない自分と同い年の少女を何の躊躇いもなく気絶させた。
「これから何するの？」
「この二人を洗脳して、綱奈ちゃんの部下にするんだよ」
「仲間？」
「そうだよ。僕のために働く綱奈ちゃんの言うことを聞く。まぁ、友達かな」

「わー！ありがとう、白蘭」
　この二人を仲間にすることを白蘭は考えていなかったが、綱奈の部下にするという考えを思いつき、時間を掛けるのも勿体無いので手っ取り早く洗脳することに決めたのだ。
「う～ん。でも、作ったやつが超のつく変態だからねぇ。裸にしないと使えないし、色々変な言葉も教え込んじゃうんだよねぇ」
「それでもいいよっ。白蘭のために二人を上手く使って見せるから」
「それなら安心かな」
　綱奈と白蘭は機械を操作する端末の元へ行き、機械を作動させる。
「起動します。・・・第一段階、肉体改造を開始します」
　すると機械が作動し、機械音声が流れ始め、乳首とクリトリスに刺さってる注射針から媚薬が投与され、マンコとアナルに突っ込んであるバイブが軽く振動を始める。
　さらに貼ってある電極パッドも刺激を開始し、太ももやお腹、胸が僅かに震え始める。
　投与される媚薬は綱奈の使った媚薬の数倍の効果があり、それはバイブからも滲み出ており、さらに電極パッドは肉体を活性化させ、快楽神経を太く大きくしていく。
「うぁぁっ、あぁぁぁっ、はぁっ、ああっ、あぁぁぁ、あっあっあっあっ、あぁぁっ」
「ひぃっ、ひっ、あっ、あっ、くぅっあっ、うあぁっ、あぁぁっ、あぁぁぁぁっ、あっ」

二人はバイブによる媚薬によって改造されたマンコとアナルからの快感で、無意識の内に喘ぎ声を上げてる。

すでに二人のマンコからは愛液が滴り、バイブを伝って地面に滴を落としてる。

電極パッドから与えられる電気は快楽神経を成長させるだけでなく、刺激する役割も持ち、太ももという普通の人なら性感帯にはなり得ない場所で強い快楽を受けるようになり、子宮にも電気が走り快楽を生み出している。

「あっ、ああっぁぁぁ、あんっあっあっ♥うあぁぁぁっ、はぁっ、はぁぁっあぁぁっ♥♥」

「あはっあはっあはぁぁぁっ♥あっひっ、ひっはっはっはっ、あっあっあぁぁぁっっ♥♥」

声に段々艶が混じり始め、首も小刻みに上下させ、口から涎をポタポタ垂れ流している。

電極を入れられたカエルのように身体全体をビクビク、ガクガクと痙攣させ、京子とハルはアクメを繰り返す。

バイブはポルチオを通り抜け子宮までも犯し、振動は子宮を揺らし、ポルチオ、Gスポットを刺激し、二人の身体をいやらしく改造していく。

「んあぁぁぁぁっあぁぁぁっ♥あぁぁぁぁぁぁぁぁ♥♥はぁっくっ、くあぁぁぁぁぁぁぁぁ♥♥」

「ひっひいいいいいいっ♥へあぁぁあっ、へあっ♥はぁぁあっあぁぁぁぁぁぁ♥♥うあぁぁぁっ」

京子の深く優しい声とハルの元気らしい声。

その両者の喘ぎ声は艶やかでいやらしい。

時には腰を突き出したり、上下にヘコヘコと振ったり、脚をカクカク開いたり閉じたりさせながら、二人は快楽で頭をメチャクチャにされている。

時おり顔をあげては、その虚ろな眼を見開いたり、蕩けさせたり、口をへの字にしたり、あの字にしたりしている。

そんないやらしい二人を見ている綱奈は段々と身体が火照り始め、無意識に手をパンツの中に突っ込み、クリトリスを弄りオナニーをしていた。

「二人とも気持ちよさそぉ」

「そうだねぇ。でも、綱奈ちゃんにはしないよ。廃人になっちゃうかもしれないから」

「廃人？」

「そうだよ。最悪壊れちゃうから」

「じゃあ、我慢する」

「うん。それがいいよ」

二人が話している間にも肉体改造は進んでいく。

乳首とクリトリスから注入される媚薬は全身に回り、全身を媚肉へと昇華していき、頬はほんのりと赤くなり、吐息には湿っぽさが混じり、明らかに雌の喘ぎ声を上げている。

愛液でヌラヌラと光を反射しているバイブは振動をより激しく、より細かくしていく。

乳首とクリトリスはビンビンに勃起し、小学生とは思えない程いやらしい。

「んうううううっっ、あっ、はぁっ、おはぁぁぁぁぁっっ♥♥♥おおおぉぉぉぉっ♥ほぉっ、おほぉぉぉぉぉぉぉぉ♥♥」

「おおぉぉぉぉぉぉっっ♥んはぁぁぁっ、んぁぁっ、はひぃぃぃぃぃぃ♥♥ほぉぉおぉぉぉぉぉぉっっ、おおぉぉぉぉぉぉ♥♥」

プシュッ、プシュッと潮を断続的に吹く度に腰を突っぱね、卑猥なダンスを披露している。

マンコのバイブはポルチオから子宮の部分だけがピストンを始め、子宮を突き上げ激しい快楽を二人に与えており、アナルのバイブは振動に加え、小さな突起も出現し、回転も始めアナルの肉をかき回し、振動だけでない快楽を与える。

「連続アクメを開始します」

そんな機械音声が聞こえた。

今まで京子とハルは確かにアクメをしていたがそれは断続的なもの。

これからが本当の連続アクメだ。

収まることのない最高の快楽。

小学生で知ることができるのは不幸か、はたまた幸せか。

いや、幸せに違いない。

快楽に勝る幸福はないのだから。

「きはぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ、うあぁぁぁぁぁぁぁぁっっ♥♥ああぁぁぁあっぁぁぁぁあっっ、ああぁぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜♥♥♥」

「は　ひぃっ、　はひっ、　ひ　はぁぁっ　あぁぁぁぁぁぁぁぁっっ　♥　♥　はへぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっっ、はひぃぃぃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜♥♥♥」

乳首とクリトリスにローターが付いている機械アームが近づき、乳首とクリトリスを挟み込み、振動を与える。

さらに、その小さな胸を機械アームがこねくり回すようにマッサージを開始し、尿道にも綿棒のようなものが入り込み、ピストンを始めた。

乳首からの甘い快楽とクリトリスからのビリビリとした快楽、さらに尿道をゾリゾリと擦られて発生している快楽は今まで与えられていた快楽と合わさり、京子とハルの脳を焼ききって、空っぽにしていく。

「あああぁ～～～～～～～～～っっ♥♥おおぉぉ～～～～～～～～～～～っっ♥♥ほひいいいいいいいいいいいいいい♥♥♥」
「はひぃぃぃ～～～～～～～～～っっ♥♥ひゃへぇぇ～～～～～～～～～～～っっ♥♥ひゃおおおおおおおおおおおおおお♥♥♥」
京子とハルは今までとは比べ物にならないほど身体を痙攣させている。
尿道から溢れる潮は止まることを知らず、マンコからは白濁色の粘り気のある本気汁も出始め、床にビチャビチャと撒き散らして水溜まりを作っていく。
膣とアナルの中は何度も締め付けを繰り返し、快楽を刻み込まれ、腰の振りも早くなり、カクカクッヘコヘコッと卑猥なダンスは激しさを増していく。
眼は限界まで上を向き、口からは無様な喘ぎ声を出し、二人はただの雌に成り下がっていく。
「停止まで、3、2、1・・・停止します」
１０分程経過しやっと機械が止まると二人はガクッと首を下げ、止まってもなお二人は快楽の余韻でアクメを繰り返している。
「あ・・・ひゃ・・・は・・・あぁ」
「はひっ・・・あ・・・あ・・・うぁ」
二人の顔は目元は涙で濡れ、鼻水がでて、汗でびっしょり、口からは涎を垂らし、複

数の男に凌辱された後の女のようだった。
そして、二人に刺さっている注射針やローターが離れて、バイブもずぼぉぉぉっと音をたてながら抜けていく。
京子とハルのマンコとアナルは弛緩しきり、下から見れば穴の中が見えるほど拡張され、もはや小学生のぴっちりと閉じたマンコの面影は残っておらず、アナルは完全にケツマンコになっていた。
「第二段階、洗脳の準備をします」
そんな二人に追い討ちを掛けるように再び機械が動き始めた。
機械の柱から顔は覆わないヘルメットが現れ、二人の小さな頭にすっぽりと入る。
ヘルメットの中では無数のコードが頭に刺さり、ヘルメットから出た小さなアームにより目は強制的に見開かれ、機械の柱から先端にレーザーを打つような機械が付いたアームが目の前にやって来る。
「洗脳開始します」
機械は動き始めた。
ヘルメットからバリバリと電撃が迸り、目にレーザーが打ち込まれる。
「「あがががががががががががががっっっ♥♥♥♥」」
ヘルメットの電撃は頭に刺さったコードに流れ脳に直接刺激を与えていく。

これにより頭を完全に空っぽにし、白蘭への忠誠を刻み込んでいく。
しかし、これは相当な激痛が走る。
これをどうにかするのが目に打ち込まれているレーザーだ。
このレーザーは神経に作用し、強制的に快楽を与えるものだ。
目から打ち込まれたレーザーは入った瞬間に快楽に変わり、全身に巡っていく。
この快楽は本来なら人を発狂させ、廃人にするほどだが、脳の痛みと打ち消しあい、なんとか超強力な快楽にとどまっている。
「「おぎぃいいいいいいいいっっ♥♥ひっひぃいいいいいいいいいい♥♥♥」」
京子とハルの眼はデタラメに動き回り、地上に打ち上げられた魚のように身体を痙攣させて、マンコとアナルはクパクパと開閉を繰り返し、時折締め付けており、アクメしているのが分かる。
さらに何かを求めるように腰を動かしている。
「「ほぉ〃ぉ〃ぉ〃ぉ〃お〃お〃ぉ〃お〃ぉ〃♥♥♥ほぉ〃お〃ぉ〃お〃お〃ぉ〃ぉ〃ぉ〃お〃お〃ぉ〃ぉ〃ぉ〃ぉ〃♥♥♥」」
電撃の激しさが増し、バリバリと鳴り響く電撃の激しさは眼を薄めるほどだ。
そしてそれに比例してレーザーの出力も上がり、より一層の快楽が送り込まれる。
そのせいか獣のような喘ぎ声を上げながら、勢いよく噴き出された潮はアーチを描か

ず真っ直ぐ飛び、見事な一本潮を披露してる。
身体の痙攣は凄まじく柱の中からガチャガチャと音が聞こえる程だ。
「あ〝あ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝っっ♥チンポっ、チンポっ♥」
そして二人は急にチンポなどと叫びだした。
これは脳に淫語を刻み込まれ、叫んでおり、この機能はただのオマケで製作者の趣味だ。
しかし、小学生の京子とハルが卑猥な言葉を叫ぶのは何処かいやらしい。
「ひゃががががががががっっ♥♥♥おまんこっ、おまんこお〝お〝お〝お〝お〝お〝っっ♥♥」
小学生のものとは思えない程勃起した乳首とクリトリスはプルプルと震え、卑猥な痙攣を繰り返す。
しかも、乳首からは肉体改造の成果か、僅かに母乳を出している。
「へはぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝っっ♥あ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝っっ、あ〝〜〜〜〜〜〜〜♥♥♥ケツマンコっ♥おちんぽっ♥イクっ♥アクメえええええっっ♥♥♥」
「はぁ〝っくあ〝ぁ〝ぁ〝っぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝♥♥♥白蘭さまぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝っっ♥あ〝あ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝っっ♥おまんこイクっ♥ケツマンコイクっ♥子宮イクっ♥へあ〝ぁ〝っ、イクっ

♥」
脳改造が終わったのか京子とハルはまともに言葉を紡ぎ始めた。
それは宣言だ。
自分を雌に陥れるための宣言だ。
二人の身体は汗でテカり、太ももに愛液を滴らせ、顔を上気させている。
「乳首っ、乳首イクっ♥イクイクイクゥウウウウウウウ♥♥はぁ゛あ゛つぁ゛ぁ゛つぁ゛あ゛ぁ゛あ゛♥イクよぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛♥♥」
「欲しいぃいぃいぃいぃいぃいっ♥チンポっ、おちんぽっ、おまんこにっ、ケツまんこにぃいぃいぃいぃいぃ♥♥♥」
「へやぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛っ♥あ゛っっっ♥あ゛あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜♥♥♥♥」
チンポ欲しさに浅ましい声を上げ、京子とハルはぶるりと身体を震わせた後、カッと目をさらに見開いた。
そして腰をガクンッと下げたと思ったら、急に身体全体を跳ね上げ、今までで一番多い量の潮を噴きながら大きなアクメに達した。
「洗脳完了しました」
そんな機械音声が聞こえるとヘルメットの電撃は収まり、レーザーも止まった。

「「へっはぁ〝ぁ〝ぁ〝っっ、はぁ〝ぁ〝ぁ〝っ、ぁ〝はぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝っ、はぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝」」

二人はアクメが終わると身体を弛緩させ、尿道からはチョロチョロと尿を漏らした。

その行為さえも快楽になり、二人は腰をブルブルと震わせている。

「終わったみたいだね。説明書によると来年と再来年にもう一回やるとどんなことをしても解除できない洗脳が完了するらしいね」

「いいなぁ。本当に気持ち良さそうだもん」

「今度僕が変わりに与えてあげるよ。さっ、確認しよう」

眼は虚ろを通り越してなにも写しておらず、何処かニヘラと笑っている二人に白蘭は問いかける。

「やぁ、二人とも僕が分かるかい」

「「びゃ、びゃくらん、しゃま、です」」

「うん、その通りだよ。二人にとって僕はどんな存在だい？」

「「わらひ、たちの、ごひゅじん、ひゃま、です」」

「うん、正解だよ。どうやら洗脳は完璧みたいだね。いいかい。これから京子ちゃんとハルちゃんは綱奈ちゃんの部下だ。彼女の言うことは何でも聞くんだよ」

「「はひぃぃ、わかり、ました。白蘭様」」

そして白蘭は綱奈に語りかける。
「今日から二人は君の部下だよ。上手く使ったあげるんだよ」
「うん」
「それから綱奈ちゃんに戦闘訓練も積ませなくっちゃ」
「白蘭のために戦えるってこと？」
「そうだよ」
「私死ぬ気で頑張るよっ」
死ぬ気。
その言葉を聞いて白蘭は心を踊らせた。
（やっぱり素質があるよ。さすがボンゴレ直系の血が流れていることだけはあるかな）
「うん、僕も頑張って綱奈ちゃんを育てるよ」
そして京子とハルの拘束を解き、綱奈にお風呂に入れさせた。
その後、二人にこれからの振る舞いを説明した。
「君たちは今まで通りの生活をするんだ。連絡がある時は呼ぶからね。あと君たちにも訓練を受けてもらうから」
「はい。了解しました。白蘭様」
「外ではお兄さんって呼んでね」

白蘭は３人を帰宅させ、今度は綱奈にＳＥＸをしようと考えていた。

「愛の楔を打ち込まなくっちゃねぇ」

マシュマロを食べながら白蘭はそう呟いた。

依存させよっか　その１　（乳首責め）

あれから三年が経った。
綱奈の元にはリボーンが家庭教師として現れ、居候している。
「ちゃおっス、オレは家庭教師のリボーン」
そう言って現れたリボーンは綱奈の自室で本当の目的を言う。
「オレの本当の仕事はお前をマフィアのボスにすることだ」
その言葉を聞き、綱奈は驚き、何を言っているんだと思った。
と、いうことはなく、綱奈は白蘭に全てを聞いているのだ。
これから自分が何に巻き込まれて、どういった道を歩んでいくのかを。
「僕のために強くなってね、綱奈ちゃん」
「うん。死ぬ気で白蘭のために強くなる」
そうして獄寺、山本、ビアンキ、ランボ、イーピン、雲雀、了平に出会い、ハチャメチャな生活を送っていった。
勿論、京子とハルも初対面のふりをして、親交を深めている。
そしている内に黒曜襲撃事件が発生する。

綱奈はリボーンと共に首謀者である骸を無事倒し、平和が訪れたと思ったら、次はリング争奪戦が起こった。

ボンゴレの独立暗殺部隊ヴァリアーとのリング争奪戦の霧の守護者戦。

霧の守護者として骸の代わりにクローム髑髏という、どこか蠱惑的な少女が現れる。

クロームはヴァリアーの霧の守護者であり、アルコバレーノの一人であるバイパー、今はマーモンと名乗っている、と戦い負けそうになるが、そこに骸が憑依し、マーモンを撃破。

この話はクロームが霧の守護者戦が終わった次の日、病院から帰る時から始まる。

守護者戦が終わった後気絶したクロームが犬と千種に置いていかれ、病院から出ようとしたとき、丁度出入口に綱奈が来ていた。

「ボス?」

「あ、クローム」

クロームの目の前には、ニコリと包容力があり、まるで大空のような笑顔を浮かべた綱奈がいた。

綱奈はもう中学生だ。

ツンツンとしている癖っ毛はそのままだが、腰の中ほどまで届く長さまで髪は伸びて

いた。
そして顔も幼さを残しつつ、確実に美女の道を上っていた。
学校ではドジっ子として通っているが、それは演技であり、白蘭の教育により身体能力は高い。
「何か用？」
「うん。ちょっと来て欲しい場所があるんだ」
クロームは何か嫌な予感を感じた。
なぜそう感じたのかは分からない。
目の前にいるのはボスなのに。
「・・・私、犬と千種の所に帰らないと」
「すぐ終わるから。ねっ、お願い」
「・・・分かった」
綱奈の真っ直ぐな瞳にクロームは折れ、綱奈についていくことにした。
「どこに行くの」
「もうすぐだよ」
そう言って綱奈はどんどん進んでいく。
そして、高い塀に囲まれた道で綱奈は立ち止まった。

「連れてきたよ、白蘭」
「お疲れ、綱奈ちゃん」
「誰？」
綱奈達が来た反対側から白蘭がやって来る。
クロームは初めて見る白蘭の姿に警戒心を強くした。
「やぁ、初めまして、クロームちゃん。僕の名前は白蘭。綱奈ちゃんの友達だよ」
「近付かないでっ！」
白蘭の雰囲気、クロームの直感が白蘭を近付かせてはいけないという判断をした。
クロームはジリジリと後ずさるが・・・。
「痛っ！」
「クローム、どこに行こうとしてるの？」
クロームの腕を綱奈が掴み、その力強さにクロームは声をあげる。
「ハハッ、クロームちゃん。これから僕の家に行こう」
「嫌っ！ボスっ、離してっ！」
「もう、抵抗しないでよ、クローム。白蘭、骸とのリンク切っちゃおうよ」
「うん。そうだね」
パンッと白蘭が拍手をすると、クロームが苦しみだし、倒れた。

「うっ・・・がはっ、うぅ・・・」
クロームの腹部がへこんでいた。
クロームの内蔵は事故で失っており、それを骸が幻覚で補っていた。
しかし、白蘭はクロームと骸のリンクを切る空間を作り出したことで二人のリンクが消え、骸が幻術で補っているクロームの内臓が消えたのだ。
復讐者の牢獄にいる骸はそのことを感知したが、霧の守護者戦で力を使ってしまったため、外部に連絡を取ることができずにいた。
「さぁ、行こうか」
白蘭は苦しむクロームを担いで、家に向かった。

白蘭の家に到着するとクロームはあまりの痛みに気絶しており、白蘭の家に入るとクロームのへこんでいた腹部が元に戻った。
どうやら白蘭の家にはクロームのために、幻覚で内蔵を補うような空間が作ってあるらしい。
「骸君とのリンクも切れたし、これでクロームちゃんの位置は特定できないね」
白蘭はにこやかにそう言った。

「私も調教に参加してもいいよね」
「もちろん♪」
綱奈とクロームを抱えた白蘭は地下へと向かった。

「う・・・あぁ・・・。ここは?」
クロームが目を覚ました。
彼女はベッドの上に仰向けの状態で、手と足はベッドの上部と下部から延びる鎖に拘束され、黒曜の制服も下着もすべて取り払われていた。
クロームの産毛すら生えていない脇、形の整った僅かな膨らみのある乳房、綺麗な薄ピンク色の乳首、毛の生えていないマンコに、柔らかそうな太股、スルリとした足。
その全てが露わになっている。
「目が覚めた?クローム?」
「ボス。・・・骸様を感じない。ここはどこなの?」
クロームの顔を見つめていた綱奈が目覚めたクロームに声をかけ、クロームは不安そうな瞳を綱奈に向けていた。
それは骸に綱奈が何かをしたかもしれない。

その恐怖をクロームは感じていた。
「骸には何もしていないよ。ただクロームを骸との繋がりを切っているだけだから安心して。君の内臓のこともね」
「そう」
クロームは明らかにほっとし、息を吐く。
「どうして私は裸なの。服を返して、ボス」
「それはできないよ。これからクロームを調教するんだから。裸じゃないと」
「・・・調教？」
「ちょっと体を触るだけだよ」
そう言って微笑む綱奈の顔を見たクロームは、その微笑みに安心感を覚えた。
流石、大空属性を持つ綱奈の全てを包み込む微笑みだ。
その微笑みだけでクロームの不安は和らげられた。
「調教が終わった頃には骸のことなんかすっかり忘れて白蘭の虜になってるよ」
「そんなことない。私は・・・どんなことをされても骸様のモノ。骸様を忘れるなんて絶対にない」
「ふふっ。そっか。その言葉忘れちゃだめだよ」
綱奈はクロームの腰に乗り、馬乗り状態になる。

そしてゆっくりとクロームの体の上に横たわり、クロームにキスをする。
「んんっ！」
綱奈はそのまま舌を入れ、無理やりクロームの舌と絡ませ、貪るようにキスをする。
「んふぅ、じゅむぅ、んふぅ、ふぁ、ふぅ、ん、んん」
「んく、んく、んく、あはぁぁ、クロームの唾液おいしい、ん」
綱奈とクロームの舌はいやらしく絡み合い、クロームは綱奈のなすが儘、綱奈はクロームの口内を蹂躙し、味わっている。
「んふぁ、んんんっ、んんっ、んんんんっ、んはぁ、はぁ、んふぅ、ぅぅ、あぁ」
「ふんぁ、んん、はぁ、眼が蕩けてきてる。んんん、んふぁ、気持ちいいんだね、クローム」
そして綱奈はクロームの口から離れ、体を上げる。
「はぁ、はぁ、はぁ」
「顔が赤くなってるよ。可愛い可愛い」
クロームは息を少し荒くさせ、口を半開きの状態で呆然と綱奈の顔を見ている。
「さてと、次は胸と乳首かな」
綱奈は腰から少し位置を下げ、太股の位置に移動し、ムニムニとクロームの柔らかい乳房を揉む。

「ひっ、ボ、ボス。あっ、くっ」
「優しく、優しく、ほぐしていくからね」
綱奈は手のひらで軽く乳房を潰して、乳房を回転させるように揉んだり、ぷにぷにと指を使い、優しく揉む。
そしてある程度ほぐれたと判断すると、ベッドの直ぐ傍にある様々な道具が置いてある台から錠剤が入った瓶を手に取り、瓶の蓋を外し、三つほど錠剤を口に含む。
舌を動かし、溶けた錠剤と唾液を混ざらせ、油断しているクロームにキスをし、唾液を流し込む。
「んんっ！んふぅ、んん、んんん」
クロームは最初は抵抗するが、ついには綱奈の唾液を飲み込んでしまう。
綱奈が唇を話すと銀糸が線を引く。
「んふぁ、はぁ。・・・何を私に飲ませたの、ボス」
「ん～。気持ちよくなる薬かなぁ。でも麻薬とかじゃないから安心して」
綱奈がクロームに飲ませたのは媚薬。
時間がない調教の際に使われる即効性の物だ。
含む錠剤が多いほど効果が強く、三錠は割と多いほうで、飲ませてから一分ほどでクロームの体に変化が起きる。

「はぁ、はぁ、はぁ」
特に何もしていないのに、クロームは湿りを含んだ息を吐き、頬は紅潮し、ほんのりとした火照りが全身を支配し始める。
弄られる乳房がなんとも言えない感覚を生み出し、何故か下半身、特に性器周辺が疼く。
「効いてきたね。次は乳首を責めてみようかな」
綱奈はクロームの乳房を揉むのを止めて、両手の人差し指でクロームのピンク色の小さな乳輪をクルリクルリとなぞる。
「あっ、んぁ、ん、ふぁ、んん」
（なっ、何っ？胸がピリピリして・・・）
「ほーら。ちょっと外周をなぞって、っと。乳輪をまたなぞる」
「ん、あ、ん、く、んあぁあぁ♥」
「クローム。可愛い。本当にいい声で啼くね。これなら白蘭も満足するかも」
綱奈の焦らしは15分ほど続いた。
クロームはどんどん、どんどん何かが大きくなっているのに気付いていた。
しかし、それが何なのかが分からない。
ただ胸が、胸の突起部分が疼いているのには気づいている。

「そろそろかな」
綱奈は乳輪をなぞっている最中にすっと乳首を擦った。
「ひあぁっ♥」
ビリッッと甘い電撃のようなものがクロームの胸、乳首から生じた。
その初めての感覚にクロームは可愛い悲鳴を上げる。
「ふふっ。ほらっ。もっと行くよ」
「ん、ん、あっ、ひっ、あっ、んぁっ♥」
「感じてるよねクローム」
「あっ♥はっ、な、何を、あああぁ」
「今感じてる感覚だよ。その感覚が感じるって事。気持ちいいてっこと」
「気持ちいい。ふっ、あ、こ、れが」
（この感覚が気持ちいい。でも・・・骸様が傍にいる時とは違う）
気持ちいい。
クロームにとっては骸が、犬が、千草がいる時が気持ちのいい時間、気持ちのいい感覚を感じていた。
それしか知らなかった。
今、綱奈の手によって新しい、淫らな、感覚をクロームは教え込まされている。

「ほら、乳首が気持ちいい、気持ちいい」
「ん、ひ、ひぁ♥あ、はっ、あっ」
「乳首気持ちいい、気持ちいい」
「は、あっ♥あああ、んあぁ♥あっ、ひぃ」
綱奈は何度も何度も乳首気持ちいいと唱えながら、度々乳首を擦っていたのを、乳首を人差し指でクリクリと弄る動作に変え、クロームに快楽を教えこんでいく。
「クロームも言ってみて。乳首気持ちいいって」
「んぁ、あっ、ちくびって、ん、ん、何？」
「今私が触っている所だよ」
（胸の突起。乳首って言うんだ）
知らない感覚に翻弄され、思考が麻痺し始めているクロームの思考に綱奈の言葉が染み込んでいく。
「乳首気持ちいい。乳首気持ちいい」
「はっ、あああ♥ち、くび、あ、きもち、いい」
「そうそう。乳首気持ちいい。乳首気持ちいい」
「はぁっ、あっ、気持ちっ、いいっ。ひぁ♥ぁ、ひぃ、ちくびっ、きもちっ、いい」
「偉い、偉い。偉いよ、クローム。その調子」

「ん、は、あ、あぁ♥ボ、ス。ちくび、気持ちいい、はっ、ああ、あっ」
「おまんこも濡れてきてるね。媚薬の力もあるし、乳首イキしてみようか」
綱奈がクロームの下腹部に目を向けるとクロームの無垢なマンコからは愛液が漏れだし、トロトロとした透明な愛液はベッドのシーツに作り出していた。
そして綱奈はクリクリと弄る動きを止め、親指と人差し指でクロームの乳首を優しく挟み、キュ、キュと優しく摘まむ。
「ふあぁっ♥あぁっ、ああぁっ♥」
乳首を摘ままれて生じた快楽はクロームの脳に強い電撃を与え、さっきよりも大きな声でクロームは声を上げた。
「きゅ、きゅ、きゅうぅ。きゅ、きゅ、きゅうぅ。どう、クローム。気持ちいい？」
「はぁっ、ああ、あっ、気持ちっ、いいっ。頭、痺れ、るっ、はっ、あぁぁっ♥♥」
「もっと痺れさせてあげるね。きゅっ、きゅっ、きゅうぅぅ。きゅっ、きゅっ、きゅうぅぅ」
綱奈は摘まむ時に声を出し、クロームに摘まむタイミングを教え、クロームが無意識の内に感じている快楽の波に同調させようとしている。
「それっ、だ、めっ。ひぃぃ♥あっ、あっ、あぁぁっ♥」
「でも、気持ちいいでしょ。この感覚を覚えて。快楽を感じることは幸せなことなの。

女の幸せなの。ほら、乳首気持ちいい。乳首気持ちいい」
「ひひゃ、あああっ♥乳首、いいっ、気持ち、いい、あっ、ひっ、ひぃあぁっ♥♥」
クロームの腰はほんの僅かであるが浮いており、身体はピクピクと痙攣をしている。
顔にはほんのりと汗をかき、クロームが発情した女の匂いを醸し出していることに綱奈は気づいた。
「いい調子。そろそろイこっか」
「ひんっ、あぁっ、イクって、はぁ、あ、どこに」
「どっかに行くって意味じゃないよ。今クロームの身体の中でクロームが感じている痺れが溜まってるんだ。その痺れが限界まで達した時溜まった痺れが全身を巡って凄く気持ちよくなるの。それがイクって言うの。アクメとも言うけど。クロームもお腹の所が疼いているの分かるでしょ。その疼きに集中してみなよ」
「ひゃ、あああぁ♥く、あぁぁ、あっ、あっ、んひぃ♥ひ、はぁ、ああっ。あああ、ボスっ。何かクルっ、怖いっ、ひっ、あああぁ♥ああっ♥」
「大丈夫。怖がらないで、クローム。その感覚に身を委ねて」
綱奈のいう通りにクロームはその大きな瞳を蕩けさせ、身体を、大きくなり、爆発しそうになる感覚に委ねた。
「ほらっ、イってっ！」

綱奈はクロームの乳首をギュッと摘まむ。
「あっ、あああぁぁ♥あああああぁぁっっ♥♥♥」
クロームの瞳は大きく見開かれ、身体の中で何かが弾け、強烈な快楽がクロームの身体を支配した。
その瞬間にビクッとクロームの身体が大きく痙攣し、腰は軽く浮き上がり。マンコからプシュッと僅かに潮を吹いた。
「凄い、クローム。乳首イキで潮吹くなんて」
「はっあぁぁぁ、あぁぁぁ、いやぁ、ボス、私・・・」
「ふふっ。そう恥ずかしがらないで。これは仕方ないんだよ。素質あるよクロームは」
綱奈はよしよしとクロームの藍色の髪を撫でる。
「じゃぁ、後二、三回、乳首でイってみようか」
「ボスっダメっ。まだ痺れが・・・」
「これは調教なんだから。クロームに乳首の気持ちよさ、いや、イク事の、女の本能を教えてあげる」
そうしてクロームは綱奈の手によってアクメさせられる事になる。
それが終わるころにはクロームは息絶え絶えの状態だった。
休みなしにアクメしたのだから当然だろう。

「はぁ、はぁ、はぁ、も、う、ダ・・・メ」
「あれ？気絶しちゃった」
クロームが連続アクメに耐え切れず気絶すると部屋に白蘭が入ってきた。
「あー、クロームちゃん気絶してる。やりすぎだよ綱奈ちゃん」
「ごめんなさい、白蘭。つい楽しくなっちゃって」
「クロームちゃんから骸君への依存先を、快楽で僕に変えるんだから仕方ないといえば仕方ないけどね」
そう言って白蘭は気絶しているクロームに近づく。
「ちょっと起きてくれるかな」
白蘭はクロームの身体を起こし、肩を揺らして、少しだけ意識を回復させる。
「ん・・・あ・・・」
クロームの朦朧とした瞳が白蘭に向けられる。
「今日はここまでだ。暗示をかけて返すよ」
白蘭は薄っすらと開いているクロームの瞼を指で無理やり明け、クロームの朦朧とした瞳の視線を自分の瞳と合わせる。
すると白蘭の瞳が怪しく光り、クロームの瞳に光が入り込んでいるように見える。
「あ・・・あ・・・」

「君はこの出来事を忘れる。綺麗さっぱりね。でもこの部屋に入ると思いだすことができる。それから綱奈ちゃんに”人形”と言われれば、君は綱奈ちゃんの言うことは絶対に聞くようになる。いいかい？」
「う・・・あ・・・い・・・や・・・」
　無意識ながらクロームは白蘭の暗示を拒否する。
「う～ん。流石骸君の憑依先だね。もっと強めないと」
　白蘭がそう言うと瞳の光がより一層強くなる。
「あ・・・ああ・・・あああぁ・・・あああ・・・」
　いつの間にクロームの両目は見開かれ、僅かに口を開き、魅入るように白蘭の瞳を、光を見つめる。
　そうして白蘭の強力な暗示はクロームの心に確実に刻み込まれていく。
　骸への思いで必死に手こうしていたクロームは、ついにはクロームは白蘭の暗示に耐え切れず、身体をガクガクと痙攣させ、ショワァァァと尿を漏らしてしまう。
「あ・・・あ・・・あ・・・」
　光が収まった後もクロームは顔を上げたまま、虚ろな瞳で何もない虚空を見つめていた。
「これで完璧だ。骸君にも分からないようにしたからね」

「大丈夫なの？白蘭。クローム、壊してないよね」
「大丈夫だよ。今はあんな感じだけど意思が覚醒したら元通りさ」
白蘭と綱奈は調教の後始末をして、クロームに服を着せる。
「少しずつ、君の心を変えてあげるよ」

「ん・・・はっ。ここ・・・は」
「大丈夫？クローム？」
「ボ・・・ス」
今二人いる場所は公園で綱奈はベンチに座っていた。
クロームはというと、綱奈に膝枕されていた。
（え？何で私・・・ボスに膝枕されて・・・）
「急に倒れたからびっくりしたよ。貧血？それとも争奪戦の疲れかな。まぁ、ともあれ目が覚めて良かった」
「私・・・倒れたの？」
「そうだよ。大丈夫？」

綱奈の心配している顔がクロームに映る。
その顔をみると頭のどこかでチリチリとした感覚をクロームは感じたが、すぐにどこかへと消えていった。
「もう・・・大丈夫。ありがとう、ボス」
クロームはそう言って立ち上がる。
「ふらつきはなそうだし、大丈夫だね。一人で帰れる？」
「うん」
「そっか。じゃあねクローム。身体に気をつけてね」
そう言って綱奈は公園を去り、クロームも公園を出て、黒曜へと帰っていった。
何故か、クロームのパンツは濡れていた。